

てこな・ミュージック・ジャーナル

3つの クロイツェル・ソナタ

今回はクロイツェル・ソナタと名のつく3作品についてお話したいと思います。きっかけはベートーヴェンで、その作品をもとに、トルストイ、ヤナーチェクと芸術創造の情熱が引き継がれていきます。

●ベートーヴェン「クロイツェル・ソナタ」

ベートーヴェンはヴァイオリン・ソナタを10番まで書いていますが、その才能の頂点にあったのが第9番で、それが通称

「クワレル」者に献呈することを止めたのです。その原因は同じ女性を2人が愛してしまったからだと言われています。1805年に出版されると、その楽譜には「友人クロイツェルに」との献辞が付けられ、それが通称として定着していくこととなりました。

●トルストイの小説「クロイツェル・ソナタ」

ベートーヴェンのソナタは3楽章からなり、第1楽章は緩やかな序奏ののちプレストになって、奔放なほどの情熱を迸らせます。この楽章に触発されて、ロシアの文豪トルストイは1890年に小説「クロイツェル・ソナタ」を書き上げました。

●悲劇的事件

主人公はモスクワに住む資産家の男。理想どおりの結婚ができた喜びますが、その気持ちは長続きしませんでした。8年間に5人の子供ができて、家庭としての形は整っていきながら、夫婦は些細なことで争いを繰り返す、ついには憎しみをぶつけあうほどになっていきます。妻が子供から解放され、女性としての魅力を取り戻すと、夫はその姿が自分に向けられるものではなく、他人に対するのもと思ひ込み嫉妬するようになります。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

そこに登場したのが知り合いのヴァイオリン奏者。会食の席で妻とクロイツェル・ソナタを演奏することになりました。第1楽章プレストの素晴らしさに男は久しくないほど心が軽やかになり、曲調に感動するとともに、妻を素直に見直す気分になったのです。しかしその直後に旅に出ると嫉妬心が渦巻きました。妻とヴァイオリン奏者の関係を疑い、その思いを膨らませて、急いで家に帰ることにしたのです。案の定、目に入ったのは楽しみに食卓を囲む2人の姿でした。逆上した男は短剣を手にし、妻を殺してしまいました。歪んだ愛情の果ての物語ということになりましょう。

●トルストイの小説から生まれたヤナーチェクの傑作

この物語に触発されたのがヤナーチェクです。

1854年にチェコに生まれたヤナーチェクは故郷ブルノでは名の知られた作曲家でしたが、現在のような名声は晩年のオペラ「利口な牝狐の物語り」や「マクロプロス家の秘伝」、弦楽四重奏曲などで手にすることとなりました。このような作品は全て、74年の生涯のうち、晩年の10年間に集中しています。

●ヤナーチェクの室内楽「クロイツェル・ソナタ」

創造のエネルギーとなったのはいわゆる「老いらくの恋」でした。相手は38歳年下の人妻カミラ・シュテスロヴァで、ヤナーチェクは60通に及ぶ手紙を送り、その中で「トルストイが描いたような、悩み打ちのめされ、死に追いやられた哀れな女性」の物語りを音楽にしたいといったことを語っています。

トルストイの小説で描かれる人妻の秘めた恋、それに嫉妬する夫の苦悩、そういった題材にヤナーチェクは自分の感情を重ね、弦楽四重奏曲「トルストイのクロイツェル・ソナタに靈感を受けて」を1923年69歳の時に作り上げました。「哀れな女性」への思いを表現する音型を全4楽章に遍在させ、室内楽の傑作と評判になりました。

●ヤナーチェクのもう一つの室内楽

「クロイツェル」の名が語りかける、創造の源となる突き動かされるほどの情愛。その奥深さゆえに、現在もお、多くの心を魅了し続けている3つの傑作のお話でした。では最後に、ヤナーチェクのその後はどうなったのでしょうか？

74歳、カミラへの愛からもう一つ、弦楽四重奏曲を書き上げました。題は「ないしょの手紙」で、本当のところは「ラヴ・レター」と付けたかったとのこと。純粋な愛を歌い上げた室内楽を完成して半年後、ヤナーチェクに死が訪れました。

過去のてこな・ミュージック・ジャーナルはHP「てこなどっと ねっと」<http://www.tekona.net/>でご覧になれます。